学位論文の要旨

論文題目　　地位格差のある集団間状況における外集団卑下の生起過程に関する検討

広島大学大学院総合科学研究科
総合科学専攻
学生番号　D103454
氏　　名　杉浦　仁美

論文の要旨

地位格差のある集団間状況で，葛藤はどのようにして生起するのだろうか。この問いに答えるため，本論文では，よく知らない外集団成員に対して，否定的な評価や攻撃行動を示す状況を特定し，その心理メカニズムを解明することを目的とする。

本論文では，主に以下の 2 点を検討した。まず，1 点目は，内集団バイアスに対する集団内地位の影響である。内集団バイアスとは，内集団の価値を高める，もしくは外集団の価値を低める方法で，評価的・情動的・行動的な偏った反応を示す傾向のことを指す。従来の社会的アイデンティティ理論と自己カテゴリー化理論では，自己カテゴリー化に対して自動的な過程を想定しているため，集団内要因の影響は小さいものであると考えられていた。しかし，近年では，自身の置かれた状況によって，個人的アイデンティティ，社会的アイデンティティのどちらを用いるかを能動的に選択するという戦略的な社会的アイデンティティの利用方略が提唱されている。この考えを導入することで，集団内地位による影響の予測が可能となり，集団間地位による内集団バイアスの違いを検討することができる。実験を行った結果，高地位集団では集団内地位が低いほど，低地位集団では集団内地位が高いほど，内集団バイアスを示すことが明らかとなった(詳細は第 2 章)。この集団内地位による影響の違いは，高地位集団では内集団の地位の維持・高揚を，低地位集団では内集団の地位の改善を動機づけられたことを示唆している。

2 点目は，外集団卑下が生起する過程の解明である。1 点目の検討を通して，集団間地位と集団内地位の効果が，内集団バイアスの中でも外集団を卑下する方向において顕著であることが示された。先行研究では，外集団卑下は内集団をひいきする方略と比べて反社会的であると認識されやすく，抑制される傾向があることが示されている。つまり，高地位集団低地位者，低地位集団高地位者が，外集団卑下を抑制せずに表出する心理メカニズムは不明瞭であり，これを明らかにする必要があると考えられる。そこで，本研究では，社会的アイデンティティ理論にもとづく動機的過程だけではなく，社会的支配理論の観点を導入して，外集団卑下を正当化する過程を提唱した。具体的には，高地位集団低地位者は，内集団の地位の維持・高揚の動機に伴い，社会的支配志向性が高まる。逆に，低地位集団では，内集団の地位の改善の動機により，平

等主義志向性が高まる。これらはそれぞれ，志向性と一致した正当化イデオロギーの採用を促進する。正当化イデオロギーは，外集団卑下に対して正当で知的な理由を与えるため，本来ならば抑制される傾向のある外集団卑下が表出するようになる。

この過程を含め，集団間・内地位の階層化から外集団卑下を示すまでの一連の過程について，仮説モデルを提唱した。このモデルの検討を通して，人は，自身の置かれた状況によって，特定のイデオロギーを支持する傾向があり，これが外集団成員に対する否定的評価や攻撃行動を正当化している可能性が示唆された。最後に，外集団卑下の生起過程における，集団内地位と正当化過程の重要性について考察した。各章の詳細については，以下に示す。

第 1 章では, まず, 本研究の主要な概念である内集団バイアスと地位の定義を行い，関連する理論についてレビューした。その結果，根底に自己高揚動機を仮定する社会的アイデンティティ理論をベースにモデルを構築する必要性とその限界が明らかとなった。その上で，近年示唆されている社会的アイデンティティ理論の戦略的利用の観点を導入し，集団間地位だけでなく集団内地位による影響に着目する必要性について述べた。さらに，内集団バイアスの次元について考慮する必要性を論じた。

第 2 章では，集団を大学，実験集団，及び国とした 3 種類の研究と，それら 3 研究において得られた効果を統合したメタ分析によって，内集団バイアスに対する集団間地位と集団内地位の効果を検討した。戦略的な社会的アイデンティティ利用の観点から，高地位集団では，個人間比較により脅威を受ける低地位者のほうが高地位者よりも内集団バイアスを示すと予測した。逆に，低地位集団では，集団高揚への動機づけの高い高地位者のほうが，低地位者よりも内集団バイアスを示すと予測した。内集団バイアスを集団間差異化, 内集団ひいき, 外集団卑下の 3 つの点から検討したところ，外集団卑下において，共通して仮説が支持されることが明らかとなった。

ただし，先行研究によると，外集団卑下は社会的に望ましくないものとして認識されるため内集団ひいきよりも生じにくく，第 2 章の結果を解釈するためには，社会的アイデンティティ理論の動機による説明だけでは難しいことが明らかとなった。そこで，第 3 章では，外集団卑下の正当化の過程に着目し，社会的支配理論の考えを新たに取り入れることによってこの説明を試みた。具体的には，正当化のイデオロギーに着目し，地位環境により特定の動機が生起し，この動機が階層拡大，または縮小のイデオロギーの採用を促すことによって，外集団卑下が正当化され，評価・行動次元に表れると予測した。最後に，地位の認識から外集団卑下が生じるまでの過程をモデルにまとめ，本論文の基本仮説について述べた。

第 4 章では，内集団バイアスに対する集団間地位と集団内地位の効果が集団間比較によるものであるという仮説を明らかにするために，集団間の関係性の調整効果について検討した。集団間の関係性が協同的である場合，上位カテゴリーが生成され，集団間比較が生じにくくなることが示唆されている。そのため，集団間地位と集団内地位の効果が集団間比較に基づくものであるならば，集団間の関係性が協同的である場合よりも，非協同的である場合に，この交互作用効果が強く見られるはずである。大学生 120 名に対して，集団間地位と集団内地位を操作した実験を行った。その結果，外集団の有能さ評価に対して，第 2 章と同様の集団間地位と集団内地位の交互作用効

果が認められた。また，この交互作用は，集団間の関係を非協同的であると認識する者においてのみ見られた。これらの結果から，仮説は支持された。

第 5 章では，社会的支配志向性(Social Dominance Orientation，以下 SDO)に対する集団間地位と集団内地位の交互作用効果に関する基本仮説 2 について検討した。SDO とは，個人が集団間の階層的関係の維持・促進を望む程度のことを指す。SDO を「集団支配志向性」と「平等主義志向性」の 2 因子に分け，内集団の地位を維持したい，または改善したいという動機にもとづいて，高地位集団低地位者は集団支配志向性が，低地位集団高地位者は平等主義志向性が高まると予測した。大学生を対象に，比較する外集団の地位を変えて集団間地位を操作し，集団内地位と併せて SDO への影響を検討したが，ここでは，いずれの効果も見られなかった。この原因として，社会的望ましさの観点から SDO 尺度の妥当性に問題があると考えた。そこで，SDO 尺度の改訂版を作成し，信頼性と妥当性を検討した。この SDO 改訂版尺度を用いて，再度検討を行ったところ，仮説を支持する結果を得た。

第 6 章では，外集団攻撃に対する正当化イデオロギーの効果について検討した。第 5 章において地位環境により特定の SDO が高まることが明らかとなったが，この SDO は，対応する正当化イデオロギーの採用を促し，外集団攻撃を正当化すると予測される。よって，正当化イデオロギーに触れる，つまり正当化イデオロギーの採用が可能な状況では外集団攻撃が生じると考えられる。予備実験において階層拡大，階層縮小のイデオロギーの刺激文を作成し，妥当性について検討した。また，SDO の集団支配志向性と階層拡大イデオロギー，SDO の平等主義志向性と階層縮小イデオロギーとの間に正の関連があることが示された。予備実験で作成した刺激文を用いて，正当化イデオロギーに触れる条件と統制条件において，高地位集団低地位者，低地位集団高地位者の外集団攻撃の程度を検討した。その結果，正当化イデオロギーに触れることで外集団攻撃を示すことが明らかとなった。

最後に，第 7 章では，地位格差のある集団間状況において，外集団卑下が生起するメカニズムを検討した一連の研究結果を総括し，集団内地位による影響と正当化過程の重要性について考察した。加えて，本論文で得られた知見の理論的貢献，実践的貢献についての考察も行った。今後の発展として，集団間態度における集団内要因の影響を詳細に検討する必要性や，正当化イデオロギー以外にも外集団卑下の正当化の材料となる社会的要因がある可能性について述べた。さらに，コストを伴う過激な外集団卑下や攻撃の心理メカニズムを説明するためには，社会心理学的領域に留まらず，領域を越えた視点が必要になる可能性について述べた。将来的な検討によって，本論文で示したモデルの精緻化や，外集団卑下の抑制を妨害する社会的要因や個人内過程のさらなる解明が期待される。